

前回は、『聖書』が〈神話〉をはじめとするさまざまな〈物語〉で書かれている意義について考えてみました。〈物語〉を通して語ることにより、人間の生の根本・根源にかかわる《真理》がみえてくる — ということでした。きょうからは神による私たち人間、そして〈おとこ〉と〈おんな〉の創造についてみていきます。

《人間の誕生》

第15回で、神が天地を創造された過程を読んでもらいました。その中で、第6日を詳しくみていきましょう。

地の獣、家畜、土を這うものを造られた『神は言われた。 / 「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」 / 神は御自分にかたどって人を創造された。 / 神にかたどって創造された。 / 男と女に創造された。 / 神は彼らを祝福して言われた。 / 「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。 (中略) 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。』(1章 26～28節) (/ は改行を示す。)

ここまでで「あれっ」と思った方がいらっしゃると思います。あなたは、とてもいいねいにお読みくださった方です。そう、もう一度よ～く読んでください。神様が「人を造ろう」と言ったとき、『我々にかたどり、我々に似せて …』と書かれています。我々？「神さまって、た
くさんいるの？」と疑問に思った方がいると思います。「たしか、キリスト教は唯一神だったんじゃない？」と。

これについては、いろいろな解釈があります。①天の宮廷で、神さまが天使たちに語りかけている。②自分を重々しく、厳しく、効果的に表現する用法（尊厳あるいは畏敬の複数）。③自問文で用いられる表現（熟慮の複数）などです。

『神の痛みの神学』という名著を著した北森嘉蔵氏は『創世記講話』の中で、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』を例に挙げ、『この場合の輩というのはやからということで複数なのです。ところがあの猫は自分に対して敬意を表させたいと思うわけです。人から敬意を表させたいと思うときには我と言わないで吾輩という表現様式がある。これを畏敬複数と称します。』と書いています。人間の表現様式には、『尊敬する場合に複数形を使うということが古くからあるようで』ヘブライ語にもそれがあるといい、この箇所でも畏敬複数形をとっていると解釈して、②を推します。また、『旧約聖書と現代』を書いた大島力氏は、神が熟慮をして発する言葉の場合、ヘブライ語では一人称複数形をとることがあるといい、③の立場です。神学者や聖書学者の間でも諸説あるようです。

《「神の似姿」としての人間》

『神は御自分にかたどって人を創造された。』ということは、どんな意味があるのでしょうか。神は人間を自分の〈似姿〉としてつくられた。これは〈神と人間が同型〉ということではなく、人間は〈神と向き合う存在〉としてつくられたという意味です。

〈神と向き合う〉— 大島氏は、『人間を神のパートナーとして、つまり呼べば応える応答関係をもち得る相手として創造したということ』と書いておられます。神さまは、海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてをおつくりになり、それらを祝福されました。しかし、神の呼びかけに応えるものとはしませんでした。人間だけを特別な存在とし、ご自分の〈相棒〉にしたのです。つまり、人間は神さまと向き合う存在として、そのかわりの中で生きようにつくられているのです。神さまから「あなた」と呼びかけられる者として、わたしの「いのち」が成立しているのです。

また、『海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。』とあるように、人間以外の他の被造物あるいは自然を支配することを、人間は神さまから委ねられています。この教えが「現在の環境破壊の元凶ではないか …」と受け取る人たちもいます。大島氏によると、リン・ホワイトという人は『機械と神』の中で、ユダヤ・キリスト教は「人間中心的な宗教」であり、人間が自分のために自然を搾取することを神の意志とした。と述べています。しかし『従わせよ』というヘブライ語は「踏みつける」という意味を持つとともに、「足もとに置く」「(王などが) 支配する」という場合の「支配」と同じ意味にもなります。つまり、直接的ではないけれども、人間は神さまから〈正しい地の支配〉を委ねられていると理解することができます。〈神のパートナー〉としての人間の応答責任とは、自然を〈正しく支配する〉こと、あるいは自然を〈正しく管理する〉ことだと言えます。私たちがその責任を放棄したがゆえに今、地球上のあらゆる〈いのち〉が危機にさらされ、大地が、海が、大気が悲鳴を上げています。

『欲望のままに生きてきたわたしたちの生き方を改め、いのちの尊さ、いのちの神秘を最優先する生き方に転換しなければ、地球は救われず、いのちあるものは希望を見いだすことができないのです。』（日本カトリック司教団『いのちへのまなざし』より）

《男と女の誕生》

神さまが〈人〉、そしてそれを〈男〉と〈女〉に創造されたことを『創世記』第1章27節で読みました。ところが第2章では、もう一つの間創造の記述が出てきます。第1章の創造物語は「祭司（神と人間の仲介者、宗教的任務をもつ者）文書（紀元前6世紀頃）」の一つであり、これから読む第2章は「ヤハウィスト」と呼ばれる聖書記者の書いた文章になります（紀元前10世紀頃）。

『主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（中略）主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようになされた。（中略）主なる神は言われた。／「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。／主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところ

へ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。 / 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。 / 「ついに、これこそ / わたしの骨の骨 / わたしの肉の肉 / これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう / まさに男（イシュ）から取られたものだから。」 / こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。 / 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかった。』（『創世記』 第2章 7、15、19～25節）

第15回の冒頭でわたしは、「私たち人間の異性を求める性的衝動（性欲）は、〈けがらわしく・みにくく・暗い〉ものなのでしょうか？」と、みなさんに問いかけました。ここからはその問いに対する答をさがしていきましょう。

第2章では、まず人（アダム）が造られます。そしてエデンの園に住まわせたのですが、「あいつ一人じゃ、さびしそうやなあ…。元気ない顔しよって。やはり『人が独りでいるのは良くない』わな」と思った神様は、人を助けるためにさまざまな動物をお与えになります。ところが人は『自分に合う助ける者は見つけることができなかった』のです。神さまは「人は自分ひとりの力では成長することも、可能性を開花させることもできそうもない。その人生を豊かにしてゆくためにも、〈動物〉ではなく、ほかの〈人〉との出会いが必要だ」と考え、『彼に合う助ける者』をお与えになります。

『（彼に）合う助ける者』は、原文では『ケネグドー・エーゼル』となっているそうです。『助ける者（助け手）＝エーゼル』とは、〈互いに補い合い、助け合うこと〉を意味します。幼児を育む親、病人を癒す医者、高齢者を介護するヘルパー…。これらの人々はすべて、それぞれの相手に対して「エーゼル」としての役割を果たしています。

しかし、人間は役割分担による援助だけでは満たされません。より人間的な交わりを求めます。それに応える存在が『合う（ふさわしい）＝ケネグドー』助け手です。『ケネグドー』には「同じ平面に立って、顔と顔を向き合わせて」という意味があります。能力や地位、身分、性の違いなどを超えて、〈お互いに人間として裸になって向き合うことのできる相手〉のことです。（カトリック司教団著『いのちへのまなざし』より）

神さまは人を眠らせ、そのあばら骨から〈女〉を造りあげます。神さまは人の補助者〈ヘルパー〉として女を造ったのではなく、人と向き合う〈パートナー〉としてお造りになり、互いに助け合う存在としたのです。人は女を『これこそ わたしの骨の骨 わたしの肉の肉』と最大限の喜びをもって迎えたのです。ここで初めて、単に人間を表す一般名詞「人」とされていた存在が〈男〉と呼ばれるようになります。人は女と出会うことにより、男となったのです。男と女という二つの性は、神さまの祝福のもとにつくられました。

今回は、〈男と女〉についてももう少しつけ加えてから、物語にもどりたいと思います。

【引用した書籍】 ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』 ・北森嘉蔵 『創世記講話』（教文館、

2005) ・大島 力『旧約聖書と現代』(NHK 出版、2000) ・日本カトリック司教団『いのちへのまなざし』(カトリック中央協議会、2001) ・光延一郎『神学的人間論入門』(教友社、2010)、